# 第３回 富山市スマートシティ推進ビジョン検討有識者会議
# 会議録

日時：令和４年８月３日（水）午後３時
場所：富山市役所８階 大会議室
出席者
【富山市スマートシティ推進ビジョン検討有識者会議委員】
森本委員（座長）、金山委員、小泉委員、下山委員、土肥委員、冨成委員、東出委員、前田委員、安平委員　※欠席：下村委員
【富山市】
市長、政策監、企画管理部長、企画管理部次長、情報企画監、スマートシティ推進課長

議事内容：事務局より資料説明を行ったのち、（仮称）富山市スマートシティ推進ビジョン（素案）の内容を中心に意見交換を行った。

森本座長）これから皆様との意見交換に入りたいと思う。ぜひ皆様から、活発にご議論いただければと思う。

金山委員）１ページ、スマートシティ政策に取り組む理由を記載しているところである。コンパクトシティ政策を深化させるということで、これまでの課題と整合をとっていただいている。一方、スマートシティのことをよくわかってない人間がビジョンを読んだ場合でも、このビジョンが今までの富山市の計画とつながってきているところが理解しやすいように、もっとアピールしていただければと思う。

25 ページの推進体制、計画期間が 10 年ということで、大枠のテーマはよいと思うが、ビジョンに位置付けられた取組をまわしてくうちに、27 のテーマも変わってくると思う。推進体制の具体的なメンバーについても柔軟さを確保できるよう、検討していただきたい。

次に、デジタル人材についてである。高度な人材は、デジタルの専門家が担うと考えられる。一方、スマートシティ、スーパーシティの領域は、文系も含めて社会に近い人たちが中心となって取り組むべきであると思う。データサイエンスの講座の参加者を見ると、経済学部や人文学部などに近いところの人たちが、色々な課題に取り組んでいると感じている。

事 務 局）ビジョンにも記載しているが、ビジョンは、都度見直していきたいと考えている。ご指摘のように 10 年後に何が変わっているのかわからないが、その都度、変化に相応しい形で見直していきたいと考えている。

土肥委員）思い付きの意見になるかもしれないが、こういうことは可能かどうかという意見を述べたい。８ページ、コンセプトと将来像は、これから作成するとなっているが、重要な部分であると思う。コンセプトが先にあって、それが時にブレーキとなりながら検討を進めることが多いと感じている。コンセプトワード以外の部分から先に作っていくのであれば、このビジョンには市民中心主義という言葉もあるので、市民参加でコンセプトワードを決めていく方法も考えられる。例えば、ＳＤＧｓのロゴマークの場合は、私の記憶では、３案くらいが先にできて、どれがいいだろうかということがネットで拡散されて、盛り上がった。そのようなやり方もあると思った。コンセプトをみんなで決める感じで、いくつか案を提示し、どれが一番伝わりやすく、どれが一番自分ごととして感じられるかといったことを投げかけてみる。興味を持った人は感度の高い人だと思う。そういう人を何らかの形で巻き込みながら、スマートシティのプロジェクトを進めることも重要ではないか。このようにやれると面白いと感じた。

また、15 ページ、「車がなくても移動できる」は中山間地域に住んでいる高齢者向けの取組のイメージがある。中山間地域に限らず、小学生、中学生、高校生の中にも、公共交通機関、移動手段が足りてない場合がある。言葉を一つ足してもらえれば、子供たちの教育環境が変化しても、移動手段によって広がるイメージになると思った。

同様に 18、19 ページ、子供の学びに関することに触れられている。オンライン教育という言葉が使われているが、子供たちの教育の場は多様化している。普通の学校だけではなく、誰もが入ることができるスクールなど、色々な教育の選択肢がまだまだ中山間地域にはない。フリースクールに通っている親は、金銭的な負担が大きいとの話が保護者から出ている。教育の選択肢を増やす方法は、オンライン授業だけではないことも忘れずに入れたらよいと思った。

最後に一つ、皆さんもどう思うのか尋ねたいことがある。中山間地域にポツンと一軒家のように住居が残ってしまった場合のことである。その場合、スマート技術で対応することが正しいのかどうか。どこまで対応することがよいのかどうか。自分には知識が足りなくて、正しい答えがわからないが、ポツンと一軒家のような住居が残った場合、そうした課題が大きくなった場合、思い切った決断を必要とされることがあるかもしれないと感じた。

事 務 局）コンセプトワードについてだが、私たちはこのビジョン策定にあたって市民ワークショップ等を開催し、丁寧に意見を集約してきた。また、目指す将来像は、バックキャスティング的に、ボトムアップ的に決めたいと考えている。ワークショップの取りまとめに時間をかけたことや、課題を解決するためのソリューショ

ンの提案ということで、各企業・団体へのヒアリングも実施してきており、そういった日程等々があって、現段階では、将来像やコンセプトワードを示せていない。現在、プロのコピーライターの方に依頼して検討していただいているが、当然複数案が上がってくると思う。選定にあたっては、様々な意見を考慮しながら決めていきたい。

事 務 局）検討中となっているコンセプトと将来像について補足説明したい。ここでは、あえてコンセプトワードと書いている。コンセプト自体は、基本理念のところで挙げている「コンパクト＆スマート」が相当する。また、コンパクトシティ政策を深化させるためにスマートシティ政策に取り組んでいくとしており、10 ページにもスマートシティ政策における「コンパクトシティ政策の深化」のイメージを掲載している。基本的にはこのあたりがコンセプトになると思っている。コンセプトワードについては、コンパクト＆スマートと言っても、なかなか市民の方には伝わりにくい部分もあると考えており、市民の方々に伝わりやすい言葉で表現したい、或いはイメージで表現したいという趣旨で検討している。コンセプトワード、将来像については、このような趣旨であることをご理解いただければと思う。

森本座長）今の説明で理解できた。コンセプトワードは、市民にとってわかりやすい言葉で打ち出すということだが、いつごろまで決定するのか。

事 務 局）11 月中に決定したいと考えている。現在コピーライターと調整中である。出てきた案を見ながら、どういった意見の聴取ができるのかを検討したい。

森本座長）それはパブリックコメントの後になるか。

事 務 局）パブリックコメントには間に合わない。

森本座長）委員から幾つか指摘をいただいた。確かに子どもの教育や移動など、子育て世代への配慮は重要である。

冨成委員）スマートシティ推進ビジョンという名称を使っているが、市民にとっては、何か堅苦しい感じがするかもしれない。今、検討してもらっているキャッチフレーズをビジョンのタイトルに使って、スマートシティ推進ビジョンという名称は、括弧書きくらいでもよいかもしれない。

事 務 局）現時点では、どういったコンセプトワードになるかわからないが、ご意見を参考にさせていただきたい。また、今年度、このビジョンを積極的にＰＲするための予算を確保している。そうした予算を活用しながら、このビジョンの内容を市民の方々にわかりやすくＰＲして参りたい。

森本座長）プロのコピーライターの方に、よいコンセプトワードを提案していただけることを期待する。

下山委員）コンセプトの一つとして、市民中心を挙げており、たいへん重要なことだと思っている。ただし、それを達成するまでには、まだまだやらなければいけないことが残っているとの印象がある。例えば、25 ページ、推進体制、ここで市民の意見がどのように反映されるのかということは、まだ入っていない状態である。この先、やらなければいけないのは、推進体制の中に市民意見が反映され、それが尊重されるような仕組みとしての体制の作り方である。もう一つは、今までワークショップベースで市民意見を把握してきたと思うが、それで満遍なく市民の方の意見が拾えているかというと、そうではないと思う。どうしてもワークショップの会場に来ることができない方もいる。このため、ワークショップと併用して、オンラインでも意見募集ができるとよい。市民の意見をどうやったら満遍なく把握できるかという部分にも注力していただく必要がある。

他市の事例を紹介すると、加古川市では、デシディムというオンラインツールが導入されている。施設の愛称募集などで使われている。デシディムを最初に開発したバルセロナ市では、予算編成の案について、市民から意見を募るなど、高いレベルでの議論もされている。オンラインで意見収集をするための土壌を作っていくことが大切である。

もう一つ、今後取り組む必要があると思っていることが、オープンデータ化についてである。今の富山市の状況を見ると、データの整理の仕方に課題があると思う。標準化されていない状態である。表に出ているデータがこの状態であれば、内部でも整理が進んでいないのではないかと思われる。これは、様々な取組に響いてくる問題である。あらゆる情報をデータとして管理をしていかなければいけない中で、これができていないことは、色々な事業に関係してくる。さらに、オープンデータとして公開されているものも使いづらい状態になっているため、市民の方もデータを使って現状を把握することができないとなると、意見募集をしても現状認識が違うままに議論が進んでしまう。このため、市の内部のデータを整理して、それを公開していくところに、これから注力する必要がある。

事 務 局）市民の意見をいかに拾い上げるかについては、確かに重要なことであると思っ

ている。富山市にはスケッチラボという市民共創の拠点があることから、そういったところも活用しながら、市民の意見を吸い上げていきたい。また、委員指摘のように、なかなかそこに出向くことができない方々もいるため、そういった方々の意見を把握することも重要だと考えている。既存のツールであるインスタグラムなど、様々な手法があると思う。幅広に市民の方々の意見を吸い上げる手法を検討していきたい。

また、オープンデータについては、データの管理が重要であると考えている。ビジョンの中では、５年後に産学官でデータの相互活用を目指すことを記載している。このためには、委員からの指摘のとおり、行政の公開データが、民間企業の方々に使いやすい状態になってないと問題である。行政が公開しているデータが活用しにくい状況があるとするならば、様々な方々のご意見をうかがいながら、利用しやすい形にしていく必要があると考えている。

森本座長）私も実は同じことを質問しようと思っていたので、お話をさせていただくと、情報の収集は、継続的にやっていくものであって、一定の期間だけを区切ってやっていくものではない。当然ＰＤＣＡをまわしていくことから、その時にお話いただいた様々な情報の収集方法もあれば、スマートシティとは別なところで、上がってきた市民の声も貴重な情報になってくると思う。多元的に情報を収集することを考えていただければと思う。

２つ目のデータの件については、都市ＯＳを構築する時に重要になってくる。ただし、都市ＯＳは一気に作れない。段階的に作っていくしかないと思う。国が一つの方針を示した時は、できるだけそれに乗せていくことが考えられる。例えば国交省のプラトーなどである。色々な共通基盤を国の方で整備することから、それにできるだけ乗りながら、前に進めていくことがよいと思う。

安平委員）オープンデータの整備は、ＫＰＩの目標設定のところや、どこを目指して、どこまで進んでいるのかという事業の管理と関係する。オープンデータの整備は、ＫＰＩの政策的な指標や、市民の方からの意見をネット、アンケートで把握するなど、そういったものが組み合わさることになると思う。事業を具体化してＫＰＩを作っていくところの段階では、「この数字がこうなるように、こんな取り組みしている」ということを、うまく結び付ける形で進めていただければよいと思う。

前田委員）ＫＰＩの設定は重要だと思っており、客観的な施策の評価ができるほか、エビデンス、データに基づいた施策の推進ができ、ＰＤＣＡをまわすことができる。また、行政の立場としては、推進方針の中にある「まずは行政が率先してデジタ

ル化に取り組む」という表現は、まさにその通りだと思う。世の中、スマホ一つで、色々なサービスを受けることができる中で、行政だけができないのは問題だと思う。ここは、行政が率先してデジタル化、そしてその先のスマートシティを進めていく必要があると思う。

事 務 局）データのオープン化、データ連携というと、県や周辺の市町村との連携が非常に重要になってくると考えている。

東出委員）先ほど下山委員から話があったように、市民の声をどれだけ拾えるかが大切だと思う。今日の資料でも市民の意見をもとに取組の方向性が整理され、わかりやすいし、イメージがつきやすいと思った。気になったことは、一般の市民の方がビジョンを見たとき、取組のところで、ＡＩやメタバースなどの用語が多いことである。スマートシティやコンパクトシティについて平たい言葉でわかりやすく説明されているが、取組のところを読むと難しいと思ってしまうのではないか。この点が懸念事項としてあると思った。

また、取組の優先順位として重点領域が３つ設定されているが、どうしてこの３つが選ばれたのだろうと思った。この３つの重点領域しかクローズアップされないのかどうか。たくさんの取組を今後 10 年間で、どのように具体的に進めていくのだろうかとも思った。その辺の進め方のイメージがつきにくい。

次に 27 ページ、推進方針、先ほども話があったが、行政が率先することは重要だと思う。また、民間事業者、行政、学術機関等の共創についても、その重要性は理解している。加えて、県と市、市の内部など行政間、行政内の共創も重要であると思う。

推進方針のグラウンドルールは、たいへんチャレンジングであり、驚きをもって読んだ。ハードルが高いと思うし、アジャイル型の進め方も具体的にはわからないが、他の自治体のモデルとなるような進め方ができるとよい。

ＫＰＩについては、数字で測ることができないものもあると思うので、過度にＫＰＩにこだわるとことはリスクになると思う。

事 務 局）実現するための手段については、最後に用語集を載せるとはいえ、わかりやすい表現に努めたい。重点領域については、市民ワークショップにおいて意見が多かったものを中心に選定している。重点領域だけを進めるわけではないが、他の取組も進めることがわかるような見せ方を検討したい。

アジャイル型の進め方は、試行錯誤しながら進めることになると思う。行政の場合は、年度単位で進めることが多いが、年度をまたいで進める方法も考えられる。手法については引き続き検討したい。

安平委員）取組の内容のイメージ図は、やるかどうかをはっきり示さない状態では書きづらいのかもしれないが、例えば、別冊の資料でもよいので、ポンチ絵などがあった方が良いと思う。

重点領域は、優先的にスピード感を持って取り組む部分だと思うが、従来の事業の中でも、色々な実証実験や実装の展開がされている部分がある。既に取り組んでいることがわかる資料も別冊などで示すとよい。ビジョンはバックキャスティングで作っているとのことなので、既存の取組みの延長線上での見せ方が難しいかもしれないが、別冊などで示すことができれば、市民にとってわかりやすくなると思う。

事 務 局）先ほども紹介させていただいたが、今年度、ビジョンのＰＲための予算を確保している。いただいた意見を参考に、ビジョンには記載しにくいような事項もわかりやすい形で表現して、普及啓発に努めたい。

小泉委員）各委員の意見と重複するところがあるが、いくつかコメントしたい。通常、計画では、「どこまで何ができている」や、「どういうところに課題がある」が述べられた上で、それを踏まえて、「こういう政策を行う」といった記述になると思う。そう考えれば、例えば、富山市ではFIWARE（ファイウェア）を導入していることや、子どもの見守りシステムを実施しているといった経験が重要になってくる。一方、オープンデータについては、エクセル情報を公開しているだけで、ビジネスで活用できる状況にはなっていないことが課題である。そういったアプローチがあると、具体的な取組が見えてくると思う。政策の様々な領域で、デジタル化を進めることになると思うが、そのための具体的な取組や方向性を提示することが必要ではないか。そういう記載がないように思う。市として、現状・課題を踏まえた上で、どういう領域に重点を置くのかといったところが気になった。具体的な課題に基づいて取り組むことがあるのではないか。

２点目は推進体制のところである。本日欠席の下村委員の意見の資料には重要なことが書かれており、共感したところである。グランドルールでは「アジャイル」が書かれているが、推進体制を見るとアジャイルな進め方を思考していない印象である。スマートシティ推進協議会がどういう組織なのかにもよるが、体制としては、柔軟でコンソーシアム的なもので、誰でも入れて、自由に意見が出されるようなイメージのものが必要ではないか。ＤＸは、特に民間や市民が協力しながら進める必要があり、プラットホーム的な仕組みがないと難しいと思う。この推進協議会は、どちらかと言えばアドバイザリー的な組織のイメージをもったが、それはそれでもよいが、むしろ必要なことは、色々なことを考えて、議

論して、事業のネタを作って、「やってみよう」という動き出す人たちが参画できる場を用意することである。そうした動きに対して、公平性の観点も踏まえてサポート、助言する体制として推進協議会が機能するのであればよいが、現時点では、力が湧いてくる仕組みの部分が弱い印象を持った。

３点目は、ＫＰＩのところである。例えば総合計画の中で下手にＫＰＩを入れても、全く成果が見えてこないことがある。網羅的なＫＰＩを早い段階で作ったものの、成果がなかなか目に見えないとなるよりは、むしろ、スマートシティの文脈の中で、個々の事業の取組の中で必要なＫＰＩを設定した方がよい。一方、市の取組として明示的に示すことができる取組、例えばオープンデータの取組は、ＫＰＩがあった方がよいかもしれない。ただし、事業の場合のＫＰＩは、具体的に動き始めてから設定されるものだと思う。そうでなければ、ロジックモデルも作れないし、ＫＰＩも設定できないと思う。ＫＰＩの設定の仕方のイメージが、これがよいのかどうか。

次に、デシディムのようなツールは、ぜひ導入してほしい。デシディムにこだわらないが、同様のシステムが幾つもあるので。入口としてはとてもよい。私たちも約 20 年前から、自分たちで開発して実践している。ワークショップでは、60 歳以上の男性の意見が多く集まってしまうが、インターネットベースで参加の仕組みを用意すると、30 代、40 代の働き盛りの方々や学生が入ってくる。呼びかけ方によっては、女性の声を集めることにつながると思う。そのトライアルとしてぜひ進めてほしい。市民の声を拾い上げていって、スマートシティのネタの部分に活かしてほしい。もちろん現場のワークショップもよいが、相互に連動しながら議論が引き続きできる取組を検討してほしい。

下山委員）ＫＰＩは、アジャイル型の取組を進めようとした場合に、非常に重要なものとなる。ＫＰＩは、ＰＤＣＡサイクルをまわしていくとき、この方向で進めていいのか、それとも軌道修正した方がいいのかを判断するためのものである。

指標の設定にあたっては、例えば「住みやすさ」は、ショッピングや飲食店、医療機関などに分解できる。その意味では、指標設定への市民参加が重要である。

アメリカの事例であるが、色々な指標を市民向けにわかりやすく可視化、地図化したものを張り出して、市民の方がそれを見ながら、疑問点やコメントを述べることができる「データウォーク」という取組がされている。データをわかりやすく示して、それに対してフィードバックをもらう取組は重要である。そのためにも、コミュニティが機能していることが前提であると思っている。

森本座長）先ほど安平委員が言われた別冊の資料については、具体的なイメージが広がると思うので、それも含めて検討いただきたい。

事 務 局）ご指摘のあった推進体制についてだが、民間の方々が入りやすい仕組みとしたいとの思いもある中で、色々と悩みながら推進体制を作成したが、指摘のように、どちらかと言うと官主導的な推進体制となっている。

民間の方々が参画しやすい協議会を作ったとしても、当初、実際にどれだけの企業等に参加してもらえるかとの懸念もあった。スマートシティ政策を進めていく上では、なるべく早い段階で、市民の方々に暮らしやすくなったという実感をいただくことが重要であるとの考えから、こういった推進体制になっている。

ただし、今後 10 年間を考えた場合、こういった形でスタートしたとしても、多くの民間の方に参加していただければ、体制も変化していくのではないかと考えている。コンソーシアム、プラットホーム、市民の参画については、委員の皆様の意見を取り入れることができないか、内部で改めて検討していきたい。

ＫＰＩについては、私たちも、取り入れやすいものから設定していきたいと考えている。また、国の方針等も考慮しながら、設定したいと考えている。

ワークショップを開いたとしても、その時間に集まっていただける方が限られている問題については、デシディムなどの新しいツールについて検討したい。

安平委員）推進体制のワーキングについては、市民参加を意識的に呼びかけられないか。ワーキングだけでなく、庁内推進本部や協議会も含めて、市民の意見が反映できる、サポーター的に一緒に取り組むことができるイメージがあると、市民から「今までとは違う」と思ってもらえる。

事 務 局）今年の８月下旬から実施する、とやま未来共創会議では、スマートシティ推進ビジョンの素案を投げかけて、市民の方々の意見を聴取することを考えている。既存の取組を活用しながら市民意見を聴取することも可能と考えている。

事 務 局）補足説明をしたい。とやま未来共創会議に関しては、今年度で３回目の開催になる。参加者の方の一部には、翌年度は運営側に回っていただくシステムで、ファシリテーションやメンタリングのスキルなどを身につけた市民と一緒に場づくりをしている。こうしたサイクルをまわしていくことで、市民の方の中にもファシリテーション人材が生まれて、共創の場づくりを地域に実装していけると考えている。

このビジョンを策定するにあたっても、市民ワークショップを開催しているが、実はそのワークショップのファシリテータも、そういう方々の協力を得ながら取り組んでいる。そういう意味では、市民の方々が参加していく枠組みも、こうした取組を発展させていければ、できていくと期待している。前回の会議で小

泉委員から、ビジョン策定にとどまるのではなく、策定とあわせてプレーヤーや取組を生み出していくべきとの指摘もあった。今年度は試験的にスマートシティと連動する形で、とやま未来共創会議に取り組んでみたいと考えている。

森本座長）委員の発言が一巡したところで、私も委員として一言発言したい。15 ページ、細かいことであるが、「便利な暮らし」で「車がなくても移動できる」とある。これ実現する手段としてＡＩが記載されているが、公共交通を賢く使うためにデジタルを使うというスタンスを重視してほしい。すでに県が実施している運行情報をはじめ、様々な取組がある。海外ではＭａａＳの形で、様々な情報を横の連携でつないで、スマホを上手に使いこなせば生活できることが示されている。必ずしも今ここに書かれているものだけでない。そういうことを考えていただきたい。

次に 27 ページ、デジタルの教育、これも重要であるが、ぜひ大学を活用してニーズの開発などをやっていただければと思う。オープンデータではないデータについても、大学と連携して、あるいは学生に研究・発表していただいて、それが、どのような課題の解決につながるのかを議論していただくことが考えられる。学術機関、研究機関の活用方法はたくさんあるので、あわせて考えていただければと思う。

冨成委員）10 ページの「ありたいまちの姿」と 30 ページの「ロードマップ」に関連する部分である。「ロードマップ」には、「シビックテックの展開による市民のまちづくりへの参画機会の拡大」とある。その中で「参加機会の拡大」のところが、課題であると感じているが、オープンデータが整備されていくと、データを一緒に見て、考えることができるようになる。また、都市ＯＳが整備されれば、データを見ることができるようになってくる。

また、シビックテックの拡大という点で考えると、シビックテックに対して、行政側がどのようにコラボレーションするのかということと、民間の事業にシビックテックを取り込むことに対してバックアップすることが重要である。

事 務 局）シビックテックを進めていく上では、委員の力添えをいただく必要があると思う。よろしくお願いしたい。

下山委員）スマートシティでできることとして、行政と民間の役割分担を変えていくことがある。この先、あらゆる地域課題に対して行政だけで解決することは無理だと思う。いかに一緒に分担ができるかが重要である。シビックテックや企業との分担の仕組みである。行政側だけでスマートシティのサービス提供を行うことは無理であり、優先順位を決められなければ、職員への業務負荷も増大する。そうで

あれば、まず、行政が持っているリソースは公開して、民間と分担ができる状態をつくることが重要である。そのために、国の方でもＧＩＦという政府相互運用性フレームワークなどを公開している。小さな技術や付加価値を創造するための方法に注力していただきたいと思う。

森本座長）先ほどの小泉委員の意見も同じ考え方であると思う。最初はビジョンにあるようなフレームで動いたとしても、行政だけで進めるのではなく、民間の力をできるだけ活用しながら、最終的には民間が主導して動いていくところに、いかに早く到達するかが重要であると思う。そういった仕組みづくりを考えていただければと思う。

小泉委員）私も全く同感で、下村委員からの意見については、ぜひ考慮いただきたいと思う。

また、先ほど発言した内容に関連して、課題や資源をスマートシティとどう組み合わせるのかと言えば、組織も重要な資源であり、例えばコード・フォー・トヤマシティとのコラボレーションは重要と考える。コンパクト・プラス・ネットワークのまちづくりも資源であり、具体的には公共交通の活性化や中心部での再開発プロジェクト等で整備した施設がある。地域の観点では、公民館活動が活発であれば、それも資源である。そういった資源とスマートシティの掛け算を考えることで、違うアイディアが出てくるのではないのか。以前、コミュニティスクールを研究していた学生がいたが、富山市はコミュニティスクールでも全国的に有名な事例となっている。例えば、GIGA スクールとコミュニティスクールの掛け算を考えてみる。また、企業の社会貢献活動と技術の掛け算を考える。このような掛け算をもっと色々と考えれば、重点領域の具体的な取組も、ユニークに書くことができると思う。そうすれば、富山市らしさがにじみ出ることにつながる。

森本座長）より具体的なご意見いただいた。各委員から多くの意見をいただき、それを事務局へ投げかけることで、次につなげていきたい。

土肥委員）27 ページ、産学官民の役割分担について意見を述べる。市民の意見をどのような手法で取り入れるかについて議論があった。一方で、私が行政の方々と近い距離で何かをしているかというとそうでもない。また、大学との間でいえば、実は私からはもっと遠い存在である。

市民を巻き込む時には、「気づいたら巻き込まれていた」という状態をつくることがよいのではないか。産学官で連携するために、わざわざ遠くで、みんなで

意見交換しようとしても、「この日のこの時間にこの場所に来てください」といっても、一般の市民は堅苦しく感じて、結局参加できない人も出てくると思う。もう少し遊び感覚で参加できるようにならないだろうか。時間を合わせて意見交換の場をセットすると、誘った側がプレゼン資料を提示し、それに対して意見を求められるような堅苦しい会議がイメージされて、若者や子育て世代には参加のハードルが高くなってしまう。もっとざっくばらんで、お互いがフラットな関係で意見交換ができる場があるとよい。

例えば、市役所１階のロビーのところで、今日もマイナンバーカードの臨時の受付や相談が行われているが、こうした場所に例えば毎週何曜日のランチタイムには市役所職員と気軽に話ができるコーナーがあるとよい。そこに行けば意見交換できるような場があるとよい。もちろん、中山間地域などの方々は市役所に出かけることがたいへんなので、地域の拠点となる施設で気軽に意見交換できる場があるとよい。推進体制の中で市民参画を促進するのであれば、堅苦しさをイメージしてしまう場だけではなく、遊び感覚で参画できる場があるとよい。

森本座長）フェイス・トゥ・フェイスは重要である。このことに関してはビジョンの冒頭に書いてあるコンパクト＆スマートシティと関連する。いつでもフェイス・トゥ・フェイスができるコンパクトシティに、スマートシティが合わさるコンセプトである。すべてをデジタルの中に置く必要はなく、フェイス・トゥ・フェイスにおける問題であれば、そこで解決すればよい。コンパクトとスマートの二つの両輪を上手に使うことが大切である。

藤井市長には会議の最初から出席していただいているので、我々の議論に対するコメントがあればお願いしたい。

藤井市長）本当に貴重な意見をいただき、ありがとうございました。スマートシティの取組に市民が参画しやすい、また、もっと身近にするための色々なアドバイスをいただいた。この有識者会議が始まった後、報道機関がスマートシティを進めることによって人と人が会わなくなり、疎遠なるのではないかと言っていた。フィジカル空間で考えれば、コミュニケーションの基礎・基盤は、交通の移動手段であったり、ショッピングする場所や医療機関であったりする。こういうものをしっかり整えていくことに加えて、サイバーをミックスしていきたい。スマートシティを進めることによって、自分自身や家族、地域の方々にとって、人生が充実するための時間が増えることを伝えたい。また、ビジョンのコンセプトワードについては、市民の皆さんが身近に感じられるものであるとともに、概念図については将来がイメージしやすいものを期待している。大変多くのことを勉強させていただき、ありがとうございました。

森本座長）皆さんに議論していただいて、市民目線で課題を解決していくことが重要であると感じた。また、富山市は、これまでコンパクトシティ政策を続けてきていることから、そのことを活かすことが重要である。また、フィジカル空間とサイバー空間がお互いに連携することが重要である。

本日いただいた意見については、事務局で持ち帰って検討していただければと思う。他に意見が特になければ、議事進行は事務局にお返しする。ご協力いただき、ありがとうございました。

事 務 局）森本座長、ありがとうございました。本日、皆様からいただいた貴重なご意見を踏まえて、引き続きビジョンの策定を進めたいと思う。また、本日の議事録を後日送付する。改めて確認をいただきたいと思う。

今回、最後の有識者会議となるが、今後ともスマートシティ推進に関し、ご指導、ご助言等いただければ幸いである。

これをもって、第３回富山市スマートシティ推進ビジョン検討有識者会議を閉会とする。本日はご多忙のところお集まりくださり、ありがとうございました。

以上